

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520471

研究課題名(和文)文字史・表記史的現象としての書体・書風に関する基礎的実証的研究

研究課題名(英文) Fundamental and demonstrative research on the Japanese calligraphic style as phenomenon in the history of writing system

研究代表者

矢田 勉 (YADA, Tsutomu)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20262058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画では、中世文書を中心とした文書資料群・古写本類や近世自筆稿本類を中心とした典籍資料群を、書風・書体の共通性の観点から再整理したうえで、それぞれの書記史的特徴を観察し直した。その結果、国語文字・表記史の最大の特徴である複線性が、社会的な教養度の階層性に応じて保持されていたこと、即ち、いろは歌書写の一字一音的な平仮名事態による初歩的書記に始まり、教養度の上昇とともに段階的に多くの書記様式を併用できるようになることが前近代国語書記の特質であり、国語文字・表記史の通史的記述に欠くことの出来ない観点であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research program, historical materials of Japanese writing system were classified from a viewpoint of calligraphic style firstly, and their characteristics as writing system were re-investigated. As the result of the research, the following things were proved. 1) Double-tracked history of Japanese writing system was kept by social hierarchy of education. 2) It was the proof of the height of the degree of education that many styles of writing could be used. 3) This is a viewpoint indispensable to describe the complete history of the Japanese writing system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：書風 書体 教養度 階層性 複線性

1. 研究開始当初の背景

(1)国語文字・表記史の研究は、国語史研究の他分野に比べて比較的後発の分野であったことは周知の通りであるが、それ故に、総体的把握に必要な方法論・目的論の構築以前に、他分野同様の研究テーマ・内容の細分化・狭小化が起きてしまったという弊害を有する。

(2)それに対して、本研究計画の代表者は、日本語文字・表記史研究の方法論的・目的論的枠組みの理論化の作業をしてきた。更に、最近になって、文字・表記の史的変遷原理に大きく関与する要素であり、従って日本語文字・表記史の総体的記述に支柱的役割を果たすものとも考えられる要素として、書記資料を生産する「文字社会」や、そこで使用される「表記システム」の「普遍性」と「特殊性」の問題を明らかにする必要性があることに考え至った。

(3)そうした問題に取り組むための具体的視点として、従来は美的要素として、或いは個人的要素として、言語史的・文字・表記史研究の範疇からは除外されてきた書風・書体に関して、これらには個人的側面と同時に社会的側面があり、まさにその点の関係性を明らかにすることが、個人と文字社会との関係性、ひいては国語文字・表記史の変化原理の追究に有効であることに思い至った。

2. 研究の目的

(1)本研究計画は、文字・表記に関わる歴史的・通時的現象のうち、これまで主として書道史的に扱われてきた書体・書風の問題を日本語文字・表記史の問題として、記号史的に捉え直そうとするものである。研究代表者がこれまでに行ってきた文字の機能的側面の史的変遷の記述的研究を補完し、日本語文字・表記史の総体的通史記述に向けての重要な作業になるとともに、通史的記述のための重要な支柱となる、個別資料生産の場とな

った文字社会の性格把握の一指標ともなり得べきものである。即ち、本研究計画は、「日本語文字・表記通史」記述の完成に向けての一側面を実際的に担うことを目的とするとともに、その理論的枠組みの構築・強化に寄与することを目的としている。

(2)書体・書風の問題を文字・表記史的に整理することは、直接的方法に依っては明らかにしがたい各時代・各分野における文字社会や表記システムの性格把握の重要な指標となりうる。また、文字・表記の機能的側面にこういった伝播の様相が見られるかを実証的に明らかにすることにより、様々なレベルにおける表記規範の伝播・変異のあり方を記述するための基礎を確立することが期待される。

(3)文字・表記史が近代国語学の一分野に取り込まれて以来、これまでその史的変遷の記述は機能的側面に偏って行われてきた。文字・表記の音声言語と大きく異なる一面は、非機能的要素が機能的要素と同様に実際的使用において重視される点である。そうした、これまでの言語史的・文字・表記史研究では等閑に付されてきた要素に対して客観的記述を試み、文字・表記史の記号史的な総体的把握を目指すことも本研究計画の重要な目的の一つである。

3. 研究の方法

(1) それ自体が共時的また通時的に一定の関連性・共通性を有すると考えられる特定文書群・特定文庫(寺院経蔵を含む)を選び、調査を行う。それらは、大きく見て同一文字社会に属するものであるが、その中に書写年代や書体・書風の近似から、その内部に於ける小文字社会の範囲を設定し、その内部における様々な文字・表記史的現象の実態を調査・記述する。更に小文字社会相互における文字・表記史的現象の伝播・変異の様相を調

査・記述する。そのことを通じて、文字社会の多層構造に関わる考察に及ぶ。

(2)近世期は、特定の文学ジャンルと固定的な書風・書体が印刷のレベルで結びついた時代であるが、そうした出版史的現象を、改めて文字・表記史的に再検討する。資料としては出版物(板本)の他に自筆稿本類を扱い、作家個人の表記習慣と特定文学ジャンルという一種の文字社会での表記習慣との関係性を明らかにしようとする。

(3)書体・書風の類似度に関する分析には研究代表者が近世版本について行った(科学研究費補助金による研究課題「平仮名字体・書体の変容と印刷技術および出版メディアとの関係に関する歴史的研究」研究代表者鈴木広光の研究分担者として)のと同様、イパレット・ネクサス等の画像分析ツールを用い、客観的な数値的データを蓄積する。

4. 研究成果

(1)書風史・書体史的観点を導入して国語文字・表記史を再検討した結果、これまで言語史的研究からは排除されてきた美的技巧、故実的規則までを含めて、多様な書記様式を場面に応じて使い分けることが出来るようになることが、前近代の知識階層にとって必須の教養であったことが明らかとなり、逆に言えば、自らの教養度の表現として、多様な書記様式を保つ必要があったことが明らかになった。具体的には、変体仮名の併存に関しても、従來說かれてきたような機能的用字法は後付けの用途に過ぎず、本質的には、変体仮名併用には情報伝達上の合理性はほぼなく、多表記性を構成する要素の一つとして、教養度を反映するという点が、変体仮名併存の本質的理由であると考えられるに至った。但し、教養度の指標として仮名字体のバリエーションの多さを利用するにあたっては、書記の情報伝達機能の点から自ずと社会的上

限が生ずるので、実際に、字体の交替、増加を伴う変化は十一世紀末頃迄でほぼ完結したことも明らかとなった。

(2)平安時代において一つの文字社会内で生産されたと考えられる実用的平仮名資料と美的平仮名資料の礼を指摘し、その表記規範に関する比較検討を行った。その結果、美的な平仮名の基盤には同じ文字社会で用いられた実用的平仮名用法があり、それに、同一字母に由来するものに、異なる草体化の様式を付与することによって生じた異字体・既存の仮名字体と同一字母に由来するが草仮名的な異字体・実用的資料で退潮の傾向にあった古層の字体、などといったものを加えて美的仮名字体体系が成立していることが明らかとなった。

(3)寺院という具体的事例から、特殊な表記習慣が狭い文字社会の中で普及し、保存される様相を明らかにした。また、その中で、有用性、合理性を有するものは、恐らく同時多発的に他の文字社会でも生じることによって、汎社会的表記習慣、ひいては表記規範に成長していくのに対して、そうでないものはそのまま文字社会の分解に伴って消滅していくことも明らかとなった。

(4)前近代において、文字社会は文字教育の場としても機能し、そこでは「手紙」が文字教育の媒体として重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。前近代においては、まず平仮名が家庭内で教育される。平安時代、長期に安定的に保持された身分社会制度の中で、平仮名は美的成熟の方向で変化し、字体数を増加させた結果、初歩教育用の文字セットを必要とするようになった。そして次段階、即ち、別仮名字体や漢字の習得は、比較的狭い文字社会の中で手紙を遣り取りすることで、実践的に行われたことが明らかとな

った。

(5)教養度の階層性表示のために保存された表記様式の複線性であるが、それらが互いに影響し合うことで、新たな表記体を生じさせることが明らかとなった。その具体例の一つが、平仮名文と変体漢文との接触によって生じた候文である。漢字の受容に当たって、訓の付与及び語彙としての漢語の大量受容による漢字の日本語表意文字化と、万葉仮名から平仮名・片仮名の成立に至る表音文字化の二途を併用したところに始まる複線性であるが、その後も更に分化を繰り返していったその複線性ゆえに、異なる文体・表記体相互が干渉することによって、更に新たな文字文化を生み出していったという日本語表記史の特質が、候文成立史に現れている。

(6)複数表記体の併存と、その使い分けの問題を再検証するなかで、表記体の本質的議論の上で指標とすべき性質について明らかとなった。その一つは、口語性 - 文語性と似た指標でありながら、重ならない部分を有する口頭語性 - 非口頭語性という指標である。本来書記言語の性格には合致しないような、即場面的言語要素、具体的には、特定の時間や場面を指示する表現、直示的表現、その他談話の流れを示したり発話の語調を整えたりする表現など、といったものを含む性質を口頭語性とするが、前近代において、片仮名文表記が選択される理由にはこの要素が大きく関わっていたことが明らかとなった。また、書記言語には、そもそも口頭言語の重要な要素である陳述性を有しない一群が存在し、それをメモ体と呼んだ。メモ体は古代から一貫して現代まで用いられ、現代でも漢文的要素が多用されるなど、日本における書記言語のあり方を捉える上で、示唆的な現象が多く観察されることも明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

矢田 勉、表記特有表現としてのメモ体非陳述的書記体の沿革、『古典語研究の焦点』、武蔵野書院、査読無、2010、pp.771-787

矢田 勉、近世における漢字研究の方法、神戸大学文学部紀要、査読無、37号、2010、pp.1-17

矢田 勉、表記史的現象としての表記習慣「東大寺文書の「着到」を例として」、国文論叢、査読有、43号、2010、pp.12-29

矢田 勉、表記体間の干渉と新表記体の創出「候文の成立に対する仮名文書の関与について」、文学、査読無、vol12-3、2011、pp.76-92

矢田 勉、十一世紀中頃における平仮名字体「実用的資料と美的資料との連関について」、語文、査読有、100・101輯、2013、pp.23-37

矢田 勉、近世・近代間における口頭語の表記体選択意識の変化、国語文字史の研究、査読無、14号、2014、掲載予定

[学会発表](計 6件)

矢田 勉、異体仮名併用の表記史的解釈、国立国語研究所・共同研究プロジェクト「仮名写本による文字・表記の史的研究」第1回研究会議、2010

矢田 勉、国語文字・表記の通史的記述の方法、大阪大学国語国文学会、2013

矢田 勉、手紙「国語文字・表記史の観点から」、東京大学国語国文学会、2013

矢田 勉、An Introduction to the Structure of the Japanese Writing System、TeX Users Group conference2013、2013

矢田 勉、文字・表記史叙述の方法、日本語学会2013年度秋季大会、2013

矢田 勉、日本語表記の構造概説、TUG2013チュートリアルを日本語で聞く会、2014

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

矢田 勉 (YADA, Tsutomu)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20262057

(2)研究分担者

(3)連携研究者